

九州芸文館×釜山「Hongti Art Center」アーティスト・イン・レジデンス 2021・2022

2022 Hongti Art Center & Kyushu Geibun-kan Overseas Exchange Program

The Third Space

第3の空間

キム・ジェウォン

Jeawon KIM

2022年12月6日(火)～2022年12月22日(木) 10:00～17:00

休館日：月曜日 九州芸文館 教室工房1・2



Nothing more
than
a dream

新井 毬子
Arai Mariko

九州 芸文館
KYUSHU GEIBUN-KAN

부산광역시
BUSAN METROPOLITAN CITY

부산문화재단
釜山文化財團

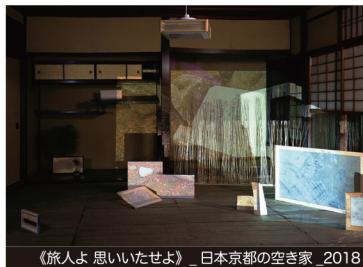
홍티 아트 센터
HONGTI ART CENTER



《終わりの始まり(上)》_釜山市峨嵋洞 86-1_2022



《終わりの始まり(下)》_ホンティアートセンター_2022



《旅人よ 思いいたせよ》_日本京都の空き家_2018



《二つの庭園(上)》_ソウル市厚岩洞 105-10_2021

キム・ジェウォン (Jeawon Kim) 現代美術家

► 2015年 M.F.A. School of Visual Arts, Fine Arts(米国ニューヨーク) 2013年 B.F.A. School of Visual Arts, Fine Arts(米国ニューヨーク) 2010年 B.F.A. 建国大学現代美術専攻(韓国ソウル)

► 主な個展として 2018年「The Third Space 09」BGSW Creative Activity Center(ポーランドウストカ)を初め、最近 2022年8月「The Third Space : 終わりの始まり」石堂美術館(韓国釜山)など6回の個展、グループ展として 2022年「関係の合成」Horangasinamu Art Polygon(韓国広州)アド15回、自主制作展示プロジェクトも多数

► アーティスト・イン・レジデンスは 2018年 京都アートセンター(日本京都)など8回

私はある都市に一定期間、滞在しながらその都市が長い時間、度外視されてきた、歴史と物語を含んでいる建築と場所をリサーチし、その空間性をテーマにその場の象徴的なインスタレーション作品を制作している。釜山文化財団のホンティアートセンターと九州芸文館との国際交流事業の一環として開催される今回の展示では残された日本式家屋で育った、韓国人アーティストとして参加している。2018年から2022年まで京都、ソウル、群山そして釜山で制作した5点の作品を展示する予定である。

私自身が他の地域の人で観察者として、対象地域に滞在しながら、日本に残っている朝鮮半島人の軌跡と現在、韓国に残されている日本人の痕跡を探しそれを作品化している。その場所が持っている特殊な歴史と文化、物語を反映している。様々な場所の空間性と時間性が交差して重ね合う作品を通じて、韓国と日本の歴史は複雑にもつれている糸のように、建築物の有機性と生命力を語ろうとする。

文_キム・ジェウォン

九州芸文館

アーティスト・イン・レジデンスについて

九州芸文館が2013年4月27日開館以来継続している国際交流事

業アーティスト・イン・レジデンス(以下A.I.R)は、福岡県、韓国・釜山文化財団、筑後七国、ちくごJR芸術の郷事業団を中心とした多くの関係団体の担当者、選抜されたアーティスト、ボランティアの皆様、そして、ご来館者の皆様によって作り上げられました。最初の7年間は福岡県、筑後市、釜山文化財団との間で九州芸文館の拠点性や定住促進を視野に入れたアーティストの国際交流事業として企画されました。多くのアーティストが九州芸文館の現代建築空間を活かし、調和した作品の発表が行われ、様々なジャンルのアーティストや美術関係者が交流しました。6年目から指定管理者のちくごJR芸術の郷事業団が引き継ぐ形となりました。ちくごJR芸術の郷事業団は、九州芸文館が開館当初より芸術文化を介した様々な事業を行ってきました。2022年は韓国・釜山文化財団のホンティアーティストセンターと九州芸文館は相互、毎年数人の中から選出したアーティスト

ト相手の施設に送って作品を制作発表をしてきましたが、今年は

コロナ禍の影響で、現地に渡航する事ができず、制作さ

れた作品が海を渡り展示会を開催する事に

なりました。

新井 毬子
(Mariko Arai)
現代美術家

1993年生まれ 東京都目黒区出身 2017年 東京藝術大学美術学部絵画科油画専攻卒業 2021年 東京藝術大学院美術学部美術研究科油画専攻修了 2021年 メトロ文化財団賞 2017年 平成藝術賞 スカラシップ 2018年-2019年 江副記念財団47回生 2018年-2019年 アテネ国立芸術大学交換留学

► 主な展示経歴として 2021年 HOMETOWN TOKYO - 東京の故郷性 - /kisoba.tokyo / 東京など多数

2022年2月韓国ホンティアートセンターと日本の九州芸文館との交流事業である交換レジデンスでは、コロナウィルスの蔓延によって、韓国への渡航、現地でのリサーチや制作が不可能となった。しかし、福岡県筑後市にある九州芸文館でのリサーチや制作活動によって、実際に韓国へ行くことができないからこそ、自分自身の中で、日韓の繋がりを知ろうとする意思を強く持つことができた。そして、国と国との間、さらに言えば、人と人との間に大きな隔たりを生んでしまっている今の時代だからこそ、今一度繋がりに目を向け、作品によって訴えかけることに重要な意味があると考える。今回の作

品制作では、繋がりの象徴としてカチガラスをモチーフにした。カチガラスは韓国ではよく見られる鳥ですが、日本ではほとんど見られない鳥で、豊臣秀吉による朝鮮出兵の際、日本人が持ち帰り、広まったという伝説が今も伝えられている。番いで行動し、卵を温めるための巣を作るカチガラスの習性を見た時、家族という言葉が浮かんだ。あらゆる世代、人種、民族に関わらず、普遍的な存在である家族をテーマに、それに伴う様々な感情や思いに着目している。筑後の人々に家族にまつわる記憶のインタビューを行った。そこで私は、形のない情緒に触れ、バラバラのように見えるイメージを1つの物語として構成、編集している。是非、観覧者ご自身の人生と照らし合わせいただき、心の中に少しでも何かが残ってもらえることを願っている。文_新井 毬子



『If I...』ホンティアートセンター_2022



『Nothing more than a dream』ホンティアートセンター_2022



『If I...』(映像作品の一部)ホンティアートセンター_2022



『If I...』九州芸文館でのプレ展示_2022